Osaka Shoin Women's University Repository

大阪樟蔭女子大学研究紀要第1号（二〇一一）

調査報告書

璉珹寺（紀寺）総合学術調査４

学芸学部　国際英語学科　佐久間　貴　士
国文学科　長谷川　伸　三

抄録：本論は璉珹寺総合学術調査の二〇一〇年度の概要報告である。昨年度までの概要報告は『論集』第45～47号に掲載した。

長谷川伸三は、古文書整理作業の進捗状況を報告している。文書群は、璉珹寺伝来の文書と住職である下間家の文書に分類できる。本年度で文書の袋入れは一、四八六点になり、第一から第九の整理箱に収めた。未整理は巻軸などがわずかに残っている。

長谷川小論では名所図会から江戸時代の璉珹寺の史料を集め、寺の景観や様子を描写している。また昨年度報告した「当寺中興由来記」の中の「御奉書之写」を原文で紹介している。

佐久間は発掘調査の概要報告である。本年度は、昨年度に引き続き第４区の調査を継続し、本年度で終了した。一昨年度は、地面から近現代の地層を掘り下げ、調査区東側で南北に並ぶ石列発見した。昨年度はさらに掘り下げを続けた結果、この石列が石垣であることが判明した。また江戸時代の遺構面（第1面）を検出した。遺構面にはいくつかの土壙が確認されたが、予定期間内に調査が終了できなかった。本年度は江戸時代の堆積層を除去し、下面の遺構を精査した。池と思われる大きな落ち込みが検出された。また土壙は上面・下面で五基検出された。南に隣接した3区で検出した遺構も、調査当時は中世の遺構と考えたが、江戸時代の土壙であることが判明した。江戸時代の遺構面の下に中世の薄い堆積層があり、それをはずすと地山になった。この面では遺構は検出されなかった。

キーワード：璉珹寺・紀寺・下問家・古文書調査・発掘調査

はじめに

奈良市西紀寺町45にある璉珹寺の総合学術調査は二〇一〇年度で六年目である。璉珹寺の歴史は『璉珹寺縁起』によると、奈良時代に行基が創建したと伝えられている。平安時代の初めに紀有常が再興し、通称紀寺とよばれるようになった。また本尊の裸形女人阿弥陀像は平安時代、一条天皇の中宮上東門院の女人往生の願いによって恵心僧都（源信）が制作されたとしている。

平安時代になると、女性は穢れがあるので往生できないという思想がひろまった。尼僧も東大寺や延暦寺などにあった戒壇で正式の受戒が行われなくなっていた。上東門院は恵心僧都に女人も往生できるかと尋ねたところ、恵心僧都はできると答え、この女人阿弥陀像を制作したという。上東門院は朝廷に働きかけて女人のための戒壇を作らせた人でもある。

総合調査はこうして伝えられているお寺の歴史を調べるために古文書調査・発掘調査を行っている。本年度から石造物調査も開始した。

総合調査は大阪樟蔭女子大学日本文化史学科と地域文化センターの共同事業で実施してきたが、二〇一〇年三月に日本文化史学科がなくなった。本年度からは、地域文化センターの単独事業となった。

この調査は昨年度から国文学科歴史文化専攻の3回生を対象に「地域歴史文化総合研究Ｂ」の科目となっている。また本年度から博物館実習Ⅱの授業を調査期間の後半に設定し、学芸学部の4回生が主として石造物の調査に参加している。博物館実習Ⅱには、歴史専攻でない学生も含まれるので、古文書調査や発掘調査の体験も行っている。

調査指導は本学の教員と大阪樟蔭女子大学で教鞭をとられたことのある他大学の教員が当たり、調査は本学学生と卒業生・神戸大学考古学研究会・璉珹寺友の会や地元住民の協力をえて実施している。

Osaka Shoin Women's University Repository

一　調査の経緯と調査体制

（1）調査の経過

古文書調査は「下間家文書」と「璉城寺文書」に分けて調書を作成している。

璉城寺は法相宗・浄土宗・天台宗と変遷し、昭和一九年に住職として下間玄恵が入り、浄土真宗となった。下間家は親鸞上人に仕え、戦国時代には教団の指導的な武将として活躍した。伝来の系図を見ると本願寺教団が戦った日本各地で一族が討死や自害をしている。江戸時代には本願寺の有力な坊官を多数排出した。玄恵家はその内の宮内卿家と呼ばれた家系で、西本願寺に仕えた。そのため璉城寺には江戸時代天台宗であった時期の璉城寺の古文書と下間家に伝来した古文書とが残されている。古文書調査は「下間家文書」から開始し、当初5箱あった文書を9箱に収納した。本年度で文書の大部分は調書を作成して袋入れが終了した。文書総数一、四八六点である。今後は巻軸やその他の史料の調査、文書目録の作成を行う。文書の解読は点数が多く、まだごく一部しか行っていない。

発掘調査は二〇〇五年度に第1区（四㎡）、第2区（三㎡）、二〇〇六・二〇〇七年度に第3区（一五㎡）を調査し、二〇〇八年度は第4区（一四㎡）を調査した（図一）。調査区の大半は近現代の盛土やごみ穴であったが、第3区で室町時代の遺物包含層（或いは溝）を確認し、第4区で江戸時代の石列を確認している。

二〇〇九年度は引き続き第4区を調査した。前述の石垣（江戸時代築造と推定）を確認するとともに近代から江戸時代の遺構面（第1面）と土壙四基を検出した。昨年度の調査はここで終了した。

二〇一〇年度も引続き第4区を調査した。その結果新たに一基の土壙を検出した。江戸時代の包含層を除去すると、もうひとつ遺構面（第2面）があった。この面から池と思われる大きな落ち込みが検出された。さらに薄い中世の包含層を除去すると地山となった。この面からは遺構は検出されなかった。

また4区の東を一部拡張（一㎡）し、隣地との関係を観察したが、石垣のある段がそのまま続いていた。遺物量はコンテナで第1区一箱、第2区二箱、第3区二五箱、第4区は本年度の二五箱を加えて七八箱である。遺物の種類は古墳時代の須恵器と奈良時代から近代までの瓦・土器・陶磁器や硯などである。瓦は奈良時代から江戸時代まですべての時代のものが出土しており、璉城寺が奈良時代の

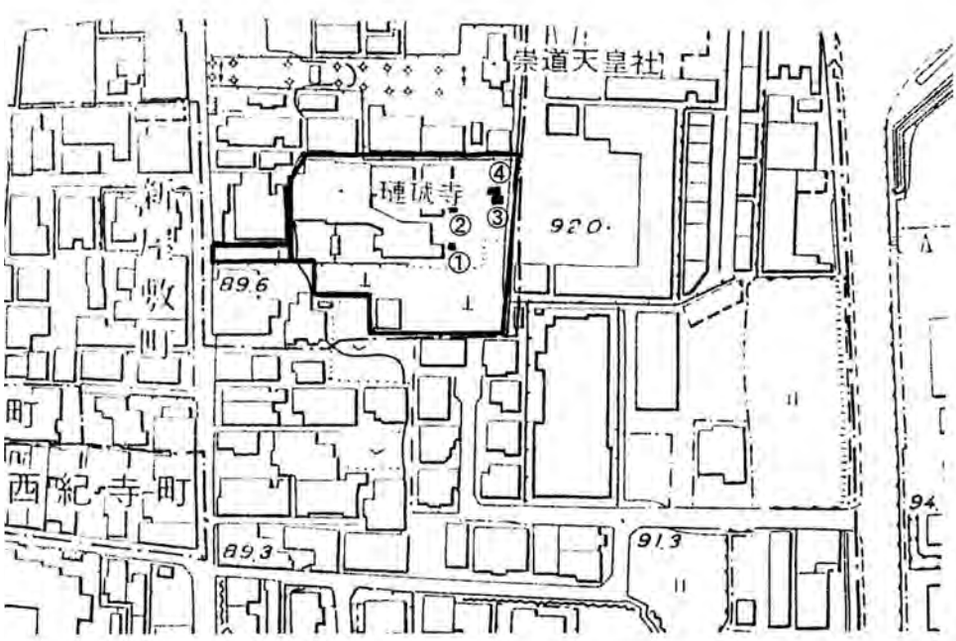

図1　璉城寺発掘調査区位置図（縮尺 1/2500、上が北）

Osaka Shoin Women's University Repository

創建以来連綿と維持されてきたことが確認される。

（2）調査体制

調査組織は以下の通りである。

璉城寺（紀寺）総合学術調査団			
代表	佐久間貴士	本学教授	考古学
調査指導	長谷川伸三	元本学教授・非常勤講師	近世史
	堀裕	東北大学　准教授	古代史
	中村直人	関西学院大学　非常勤講師	中世史
	荒武賢一朗	関西大学　講師	近世史
特別参加	平松良雄	橿原考古学研究所付属博物館	考古学

調査参加者

（三回生）井上愛子・牛尾晴江・奥田亜由香・梶井梨沙子・薦田浩子・平沙織・谷口彩乃・内藤茜・中井佑美・中川千亜紀・長山未来・浜本聡美・日野林歩・平戸のりこ

（四回生）小山真美・木澤沙樹奈・林佳菜江・神於希衣・小山真美・白井佑佳・高橋つばさ・徳千代しずか・平田真名美・廣島千幸・増川敦子・池谷静佳・池田真理子・磯崎梨紗・上田彩加・西奥明香・畑友加里・丸太弥生・宮本愛美・李玉麗・中川恵美子・樋口綾香・藤木絵真・山本典子・山原摩子・加藤奈都美・瀧山啓子

（卒業生）大西まどか・小嶋千尋・日野美香・山室朋子

（神戸大学考古学研究会）猪狩明浩・後藤健太郎・近藤学・冨田晋吾・濱田雄太・山下一樹・横尾太郎

（璉城寺友の会・地域住民）下間景甫住職・太田久・徳田英・野尻幸男・牟田口淳

第6次の調査期間は二〇一〇年九月四日から九月十七日で、九月四日は機材の搬入を行い、実際の調査は九月六日から行った。九月十二日は休日とし、十七日に撤収した。

二　古文書整理作業の状況

1　古文書整理作業（二〇一〇年九月）

璉城寺所蔵の古文書は、「璉城寺文書」と「下間家文書」に大別できるが、璉城寺文書は巻軸など別置されているものを除いて、実際には量的に多い下間家文書に混入している。そこで古文書のほぼ全部を下間家文書の名称のもとで、保存状態を生かして「下間家一」以下の文書保存箱に入れ替えている。今後文書目録（データーベース）の作成段階で、璉城寺文書を抽出できるようにしたい。昨年度は「下間家八」箱までであったが、今年度は巻軸を入れた「下間家九」箱が増加した。

以下に箱ごとの文書点数と調査の進行状況を示しておく。なお点数は原則として文書一点を中性紙封筒にいれて番号を付けたものを一点とする。一括して保存されていた文書を別の封筒に入れる場合は枝番号をつけ、これらも各一点とした。封筒に表題（内容）、年代、作成者、宛名等を記入したものを「調書作成済み」とした。

下間家一	（番号一～五七、五三欠番）	五六点	調書作成済み
下間家二	（番号一～一九八）	三二〇点	調書作成済み
下間家三	（番号一～六二）	六二点	調書作成済み
下間家四―一	（番号一～二九七）	三四九点	調書作成済み
下間家四―二	（番号二九八～三一四）	三一六点	調書作成済み
下間家五	（番号一～一四七）	一六二点	調書作成済み
下間家六	（番号一～九一）	九三点	調書作成済み
下間家七	（番号一～九九、一二一欠番）	一一三点	調書作成済み
下間家八	（番号一～七）	一五点	調書作成済み
下間家九	巻軸一四本・鍵		調書未作成

古文書の総点数は一、四八六点（番号九七三）となり、そのすべてが調書作成済みとなった。またデーターベース化は、下間家一箱の一番から下間家四―一箱の一五〇番までに達している。

2　近世名所記に見る璉城寺

近世には各地の史跡・名勝や社寺を対象にした名所記・名所図会が書かれ、出

Osaka Shoin Women's University Repository

版されている。ここで大和および奈良を対象とする名所記・名所図会のなかから、璉城寺に関する記述を取り出して、検討してみる。

『大和名所図会』巻之二

紀寺（紀寺口といふ所にあり。旧名璉城寺といふ。行基菩薩の開基、桓武天皇封戸（ふこ）をたまひし事「釈書」に見えたり。その後廃せしかば、紀有常の再興より紀寺とぞいふ）

注　紀寺　元明日香村小山西北方にあった紀氏の寺院。平城遷都後奈良に移る。元紀寺町。

（平井良朋編『日本名所風俗図会』９奈良の巻、角川書店、一九八四年、四四、五三一頁）

『南都名所集』巻第五

紀　寺（きでら）

当寺の縁起にいはく、聖武天皇の御宇に行基菩薩の開基なり。この寺の寺号を璉城寺（れんじょうじ）といふ。行基手づから阿弥陀ならびに観音の像をつくりて安置し、毎年七月朔日より八月一八日にいたるまで四十八日の称名念仏を勤修（ごんじゅ）したまへり。また一条（の）院の后上東門院の御願によりて、恵心の僧都弥陀の裸形を作りて安置せらる。そののち年経てこの寺破損におよべり。ここに紀有常（きのありつね）朝臣再興ありしより、名付けて紀寺といふなり。桓武天皇延暦二年十二月に、当寺へ封戸を納めたまひしよし『釈書』に見えたり。裸形のあみだ、いまにあり。秘仏なれば、つねにをがまれおはしまさず。鎮守は崇道（そうどう／すどう）天皇の禿倉なり。これ光仁帝の御子早良（そうら）太子にておはしますなり。

（さし絵―図２）

咲きそふは御法の花の紀寺かな

注　崇道天皇の禿倉（ほこら）　璉城寺東北に鎮座。俗に紀寺天王と称し、この寺の鎮守とされた。怨霊を鎮止するために祀った御霊神社の一つであろう。春日大社の末社であった事もあり、現社殿は移建された桃山時代の重文建築。

（平井良朋編『日本名所風俗図会』９奈良の巻、角川書店、一九八四年、二六四～二六五、五七四頁）

『奈良名所八重桜』七

吉備（きび）の森　璉城寺

下清水の南にあたり、一町ばかりのもり見ゆる。これなり。そもそもこの吉備右大臣実保（さねやす）卿と申すは、元正・聖武・孝謙・廃帝・称徳・光仁六代の聖主（しょうじゅ）に仕へたまふ儒臣なり。（中略）仁皇四十五代聖武天皇天平七年乙亥三月、玄昉（げんぼう）僧正と同船し帰朝し、この国において儒学（じゅがく）をひろめ、右大臣に任じ、人皇四十九代光仁天皇宝亀六年之十月、行年八十二にして薨じたまふを、この所にうづみぬ。さるによつて、いまの代まで吉備のもりとも、または吉備塚ともいふとかや。

さて、このもりより北に、璉城寺という有り。開基は行基菩薩、むかしは三論宗にて、日輪山東大寺の末寺とし、二町四方の寺中に数々の堂舎甍をならべ有りしが、消失の後、零落に及びしを、武内（たけうち）の宿禰（すくね）より十八代の後胤、左兵衛佐紀有常卿再興したまひてよりこのかた、世の人、紀寺（きじ）

図２　紀寺　れんじやうじ

Osaka Shoin Women's University Repository

といへり。いつの代よりか、平安城知恩院の末寺となる。寺領二十石有り。御本尊は耳根得道（じこんとくどう）の菩薩、水月道場の観世音にておはします。奥院なる伽羅陀山（からださん）の地蔵菩薩は、小野の篁（たかむら）の作なり。今の帯ときの地蔵菩薩も、本はこの寺におはしましけるが、寺零落の後、かの所へ渡らせたまふ。これ作は稽文会（けいぶんえ）といふ。さて鎮守一社は、天武天皇の御皇子崇道尽敬（じんきょう）皇帝を祝ひたてまつる。

注　璉城寺　常行山といい浄土真宗遣迎院派。璉城寺とも記す、現奈良市紀寺町に所在。『奈良坊目拙解』では明日香に存する紀寺の別院としている。江戸時代は朱印二十石をうけた。

注　崇道尽敬皇帝　光仁天皇の皇子、元東大寺に住す、桓武天皇の時に皇太子に立たれたが、中納言藤原種継と隙を生じ、ついに人をして種継を射殺させ、皇太子を廃せられた。後乙訓寺に幽閉、淡路島へ配流される途中死去した。遺骸は淡路島に納められたが、後にその祟りを恐れて大和国八島陵に改葬せられ、崇道尽敬皇帝と称した。

（平井良朋編『日本名所風俗図会』９奈良の巻、角川書店、一九八四年、三五三～三五四、五八三頁）

引用文中でふりがなは（　）に入れ、一部省略した。注は編者のものである。『大和名所図会』は寛政三年（一七九一）の刊行、『南都名所集』『奈良名所八重桜』はそれ以後の著作と思われる。『南都名所集』の記述が、現在の璉城寺に伝えられている縁起に近い。『南都名所集』と『奈良名所八重桜』は、ともに鎮守を崇道天皇社としている。『南都名所集』のさし絵（図２）は、近世後期の璉城寺の様子を伝えている。入口門と本堂が近すぎるが、妻入の本堂は現状に近い。ただ現本堂は間口三間であるが、さし絵では、間口二間で、中心に柱がある。庫裏は描かれていない。鳥居の奥に南面する社が崇道天皇社であろう。表門も描かれておらず、二人の人物は門前の往来を歩いているようである。『奈良名所八重桜』の記述は、縁起などともかけはなれており、何を根拠にしたものかわからない。

３　「当寺中興由来記」の補足

前回の報告で紹介した史料「当寺中興由来記」の中で、省略した部分「御奉書之写」を以下に原文のまま紹介する。

（表紙）「当寺中興由来記」

一当寺天台宗ニ改、京大仏養源院末寺ニ成候事ハ、（以下略）

願書之写　　一南都紀寺町璉城寺事、（以下略）

御奉書之写

御方（芳ヵ）札致披見候、宮様益御機嫌能此節日光　御在山之御事候、然は南都紀寺町璉城寺他宗ニ而、御朱印廿石被附置候へ共、此度本末之出入有之、右之寺　公儀江被召上候ニ付、貴院末寺被相願候所、先月廿一日其地於御奉行所願之通被仰付候由、御紙面之趣遂言上候、従来彼地台門之寺院無之候所、今般ニ始り候義台宗興起之基と御感悦不斜候、此上弥彼ノ寺繁栄之応情専要ニ思召候、恐々謹言

壬四月五日　　信解院

住心院

養源院前大僧正

然処泰宴儀享保九年辰ノ四月より五箇年之住職ニ而、（以下略）

享保九年（一七二四）閏四月、京都の僧侶二人から養源院の前僧で日光輪王寺に転じた僧への書簡で、璉城寺が養源院の末寺となったことを慶賀し、奈良には従来天台宗の寺院がなく、「台宗興起之基」となると述べられている。

「当寺中興由来記」その他にもとづいて、近世の璉城寺の様子をまとめておく。

［近世の璉城寺略年表］

慶長七年（一六〇二）八月　徳川家康より朱印地二〇石を与えられる。朱印地は添上郡肘塚（かいのつか）村（六・五二五石）・法華寺村（一三・四七石）。

享保年中　住僧乱行にして寺産什物を忍辱山来迎寺（注ー忍辱山（にんにくさん）円成寺来迎院、奈良市忍辱山町）に売りて真言宗に改宗せんと欲す。本寺誓願寺より之を止む。悪僧は一旦亡命逐電すといえども、終に京都に於て禁獄の上追放せらる。

享保八年（一七二三）一二月　法相宗興福寺と浄土宗誓願寺（京都）との間に

Osaka Shoin Women's University Repository

この寺をめぐる本末争論が生じ、朱印地を没収された。以後、天台宗京大仏養源院を本寺とする。

享保二〇年（一七三五）成立の「奈良坊目拙解」では、璉珹寺は高市郡明日香村の紀寺の別院で、石高二〇石、浄土宗の誓願寺末寺から天台宗の京大仏養源院末寺になったとする。

以下歴代住職

泰宴　享保九辰年（一七二四）四月より五か年の住職。

実円　享保一四酉年（一七二九）より一七年間の住職。

実啓　延享二丑年（一七四五）より三一年間の住職。この間に本堂・庫裏とも建立致し、安永六酉年（一七七七）一〇月一〇日遷化す。

本堂・庫裏の建立は延享二年以降。延享三年（一七四六）に璉珹寺現住沙門（実啓）から古新伝来の縁起を勘考することを求められた無名山人が完成したのが『璉珹寺紀』。

実弘　安永七戌年（一七七八）住職。安永九子年（一七三〇）京都にて追放を仰せ付けらる。一年余無住。

信行坊（快融）　安永一〇丑年＝天明元年（一七八一）三月より文政五午年（一八二二）一〇月までの住職。

道融　文政五午年（一八二二）一一月より住職。

明治元年（一八六八）取調旧高、法華寺村　璉珹寺領　一三石四九四〇、紀寺村　春日御蔵方　一一八八石七三〇〇、肘塚村　璉珹寺領　六石五〇六〇　（木村礎校訂『旧高旧領取調帳　近畿編』近藤出版社、一九七五年）。

昭和一九年（一九四四）　浄土真宗遣迎院派となる。

三　二〇一〇年度発掘調査の概要

本年度は昨年度に引き続き第4区の調査を行った。第4区は寺の敷地の東側（本堂の裏）、第3区の北側に隣接している。面積は東西二一．五m、南北五．九m、約一四㎡である。昨年度東端で石垣が検出されたので、東側を五〇cm拡幅した。石垣の上段は東側隣接地の境のコンクリート擁壁まで同じ高さで広がっていた。石垣に接する瓦片や石の集積は、石垣に沿って幅三〇cmほどあり、石垣の裏込めと考えられる。調査範囲内では土塀の痕跡がなく、江戸時代の土塀はコンクリート擁壁の真下あたりに想定される。

（a）土層

堆積土は昭和六〇年代以降の土層を第1層、近代から昭和六〇年代までの土層を第2層、江戸時代の土層を第3層とし、中世の土層を第4層とした。第1層は厚さ約六〇から七〇cm、隅や灰、ゴミがたくさん混じった土と、墓地造成の時に盛った山土である。第2層は、厚さ約一〇cmの上層と、厚さ約二五cmの下層とに分かれる。下層が石垣の上と石垣の前に堆積している。第2層は多量の瓦を含んでおり、調査区東側にあった土塀を崩した時に堆積したものと考えられる。土塀は前節で紹介した江戸時代中期の璉珹寺境内絵図に描かれている。住職さんのお話では、全体はトタン塀（現在はコンクリート擁壁）になっていたが、戦後しばらくの間土塀の一部が残っていたそうである。第3層は厚さ約一〇cmで、暗灰色粘質土で、黄色土のブロックを含んでいる。第4層は茶褐色粘質土で、厚さ五から一〇cm。古代から中世の遺物を少量含んでいる。その下が地山である。

（b）遺構

遺構は第3層の上面と第4層の上面で検出されている。第3層の上面を第1遺構面、第4層の上面を第2遺構面とする。

昨年度は第1遺構面からは石垣一ヶ所と土壙四基と土器や瓦の廃棄場所一ヶ所を検出したと報告した。この廃棄場所は本年度の調査で瓦などを廃棄した土壙であることが判明し、土壙61とした。土壙は計五基となった。いずれも江戸時代中期から後期のものである。

石垣1　石の上面は地表下約七〇cmである。上部を第2層下層が覆っている。石は二〇cm大の河原石で西側に面をそろえて、南北に並んでいる。基礎に約三〇cmのやや大きな石を並べ、その上に二から三段石を積み上げている。石垣の裏側は瓦や小石が密に敷きつめられ、幅約三〇cmの裏込めと考えられた。昨年度石垣は第1遺構面にのっていると報告したが、本年殿調査で地山に直接のっていることがわかった。石垣付近では地山が高くなっている。石垣の築造時期は江戸時代と推定している。

Osaka Shoin Women's University Repository

写真１　池１の護岸（西から）　左側は土壙でこわされ石がない

写真２　池１東壁際土層（南から）護岸の下に厚さ 50㎝ほどの堆積層がある

Osaka Shoin Women's University Repository

土壙61　昨年度土器や瓦の廃棄場所と報告した遺構は、燃えないゴミを集中して捨てたゴミ穴であることが判明した。一八世紀。

池1　（写真1・2）第4区の西北隅で検出されたと東西二m、南北一・五m、二辺は直角にまじわっている。深さ九〇cm。切り込みは第2遺構面。池がかなり埋った段階で池岸近くに石を二段に敷いた護岸が検出されている。石の間から底部に孔をあけた完形の土師皿が出土した。東および南の壁際を底面まで掘り下げたが、北側は調査区が深くなっているので、安全性考慮して掘り残した。池の堆積土は護岸の石の下部当たりで上層と下層にわけられた。下層は灰黒色粘質土で、上層は、黄褐色砂質土がはいり、明らかに池を埋めた状態を示していた。この埋土からは一八世紀の遺物が出土している。下層の遺物はまだ未整理だが、十七世紀初頭以前のものが多い。池の構築年代は一七世紀以前にさかのぼりそうである。

池1の脇には現在も石の護岸のある池があり、西に接する建物や庭園は昭和に池を埋めて造った。昭和に埋められた池が江戸時代中期に本堂再建後造られた可能性が高い。今のところ、出土遺物の時期から、本堂再建の頃に池1が埋められ、新たな池がつくられたとしておきたい。この池も昭和に埋められ一部が現在残っていると考えたい。

（c）遺物

遺物の出土量はコンテナ二五箱である。新たに発見した土壙61と池1からの遺物量が多かった。池1の護岸の石の間から孔の開いた完形の土師器、下層からもほぼ完形の土師器が出土した。）。

本年度調査の遺物は未整理だが、概要は以下の通りである。

古墳時代　須恵器
奈良時代　瓦・土師器・須恵器
平安時代　瓦・黒色土器
鎌倉時代　瓦・瓦器・中国製白磁
室町時代　瓦・瓦質土器・陶器・硯・朝鮮白磁
江戸時代　瓦・土器・陶磁器・硯

おわりに

今年は調査の終了が九月一七日で、原稿の締め切りが九月三〇日であった。そのため調査の概要を十分に吟味することができず、簡単な事実報告となった。。

本年度から境内の石造物の実測と拓本を取り始めた。古い紀年銘のある墓石には慶長年間の「受誓」墓があり、自然石であった。寛永年間の墓石も自然石で、仏像を刻んだ墓石が元禄年間となっている。石像物調査は始めたばかりなので、これからの調査がたのしみである。

最後にいつもながら調査に協力していただいている下間景甫住職に厚く御礼申しあげます。また「璉珹寺友の会」の皆様と地元の方には調査参加のみならず、食事の調理をすべてしていただきました。あらためて皆様に御礼申し上げます。

また本学学生と卒業生、神戸大学考古学研究会の学生の方々、調査にご協力いただきありがとうございました。

（付記）

本研究は平成二二（二〇一〇）年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成費の交付を受けて行われた。

執筆分担は、はじめに・一節・三節・おわりにが佐久間、二節が長谷川です。